

馬込便り

日本聖公会東京教区 大森聖アグネス教会



245 号

2024 年 1 月 28 日発行

編集・印刷：

馬込便り編集グループ

日本聖公会 東京教区 大森聖アグネス教会

管理牧師 司祭 ジェームズ 須賀義和

〒143-0025 東京都大田区南馬込 1-58-8

Tel&Fax (03) 3771-3459

E メール：agnes.tko@nssk.orgホームページ：www.nssk.org/tokyo/church/oomori/

巻頭言

「共苦の共同体」

司祭 ヤコブ 荻原 充



二〇二四年一月六日顕現日に司祭按手の恵みに与りました。これまでのみなさまのお祈りとお支えに感謝いたします。神と人々とに仕え、務めを全うすることができまますようにこれからもお祈りいただけますとありがたいです。

さて、わたしは上智大学大学院実践教学研究科死生学専攻で病院チャプレンの研究を行っており、一月十六日の締め切りに向けて修士論文を執筆しています。

わたしは妻を聖路加国際病院で看取ったことから、病院において特定の宗教を持たない多くの患者に対して、チャプレンがどのように関わるのがふさわしいのか、宗教者であるチャプレンの存在意義についてこれまで問い続けてきました。キリスト教系の病院であるかに関わらず、

我が身を投げ打ってでも痛み苦しむ人を救いたいと、医師であれ、看護師であれ、病院で働く者であれば誰もが思うことでしょう。ならば、なぜ病院に宗教者であるチャプレンが必要なのか。医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、臨床心理士などそれぞれに専門性があります。他の職種とは異なるチャプレンの専門性とは一体何に見出せるのかという問いをわたしはずっと持ち続けてきました。

しかしながら近年、教会や病院の現場において、聖職者の資質が問われるような事件が聖公会だけでなく他のキリスト教団でも続発しています。したがってチャプレン一個人の資質やケアのスキルだけに頼るのではない、相互に支え合うチャプレンの在り方を検討するための論文を執筆しています。同じキリスト者、また、たとえ同じ教団に所属している者であってもキリスト教の解釈は異なり、ケアに対する理解や方法論もそれぞれ異なります。このような個々の思想的・解釈的な違いを越えて、チャプレンがチームを形成するためには、前提となる共通理解が必要であると考え、その考察を進めています。

チャプレンチームを形成する、すなわちつながりを生む源泉は、キリ

スト者であるチャプレンが独自のまなざしを持つことによるとわたしは考えています。そのキリスト教信仰に基づく独自のまなざしを、わたしは「共苦(Compassion)」だと思っています。主イエスは、病人や障害者、女や子どもたち、娼婦たちのような当時の宗教的・社会的価値観によって周縁に排斥され、孤立していた「最下層・最底辺に生きる『受苦者たち』」のもとへと赴き、共に生きることへと招きました。そして十字架にかけられることによって、「イエス自らも大いなる『受苦者』」となりました。このようなイエスの「苦しみの共有(Compassion)」の態度において、「苦しみのコミュニケーション」とでも呼ばれるべき交わりの輪が形成されたのです(滝澤武人『イエスの現場』)。病院も教会も共苦の共同体である。苦しみを分かち持つことによってつながるのが、チャプレンチームであり、また教会であるとわたしは考えています。

